

---

# HAPPENING!

koro

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

HAPPENING!

### 【著者名】

kororo

N3850B

### 【あらすじ】

幸薄な少年とトラブルマイカーな少女が繰り広げる学園ラヴコメディ

## 第零事・登場人物紹介（前書き）

この小説はk o r oの第一作目です。未熟なので、誤字脱字や用法の間違いなどがあつたら、報告お願いします。もちろん感想もお待ちしています。

## 第零事・登場人物紹介

### 登場人物紹介

黒河 翔 クロカワ ショウ (15)

主人公

ルツクスは上の下

成績は中の上

運動神経は中の下

趣味は「読書」

短黒髪黒目

幸薄ヘタレツツ「ミミ少年

人前に出るのが一ガテ

コメント

「こういうのは得意じゃないんだが…まあよろしく

黒河 楼 クロカワ ロウ (14)

主人公の義妹

ルツクスは上の上

成績は中の上

運動神経は中の中

趣味は「愚兄いびり」

毒舌料理下手少女

十一歳のときに孤児院から引き取られた双子の片割れ  
実は恥ずかしがりや

コメント

「……（赤面）」

黒河 蓮 クロカワ レン (14)

主人公の義弟

それ以外はまだ謎な少年

瑞樹 亜衣 ミズキ アイ (15)

メインヒロイン

ルツクスは上の上

成績は下の中

運動神経は中の中

トラブルメイカー

趣味は「お昼寝」

長茶髪黒目

コメント

「ニニニ…」

五十嵐 純 イガラシ ジュン (15)

誕生日が四月一日の元氣少年

身長は小さいが成績と運動神経は抜群

カワいいといわれてもカッコイイとはいわれない「自称」悩み多き

少年

見かけによらずかなりのナンパ師

趣味は「ナンパ」

短黒髪灰目

コメント

「ヤ二の姉ちゃん！ワイと遊ばへん？」

山吹 桜 ヤマブキ サクラ

まだ少し謎な人物

実年齢不詳

見た目は二十代前半

背は小柄だが出るところは出でている。

天然

鬼島 吹雪 オニジマ フブキ

まだ少し謎な人物N 02

実年齢不詳

見た目は三十代前半

背は高い＆スタイル抜群

暴力女

e t c . . .

## 第零事・登場人物紹介（後書き）

主要人物です

一応これからも新キャラが出たら随時更新していきます。

## 第壱事・第一部～受験編～プロローグ（前書き）

プロローグです。短いですが読んでやってください。

俺はある建物を見上げていた……。

## 高校の校舎である。

なせ見上げてしるのかといふとこの校舎が大きいのとテサインが  
よくて個性的悪くて変な形をし

てしたたらた

俺のほかにも同様な奴がいるので俺の感性が変でないことがわかる  
と、いっても俺とほかの奴らが感性が変。というのなら話は別だが

「……とこんな事には来たんじゃなかつたな……」

俺は受験をしにきたのだつた。

筆記試験と一次面接試験は市民ホールで行われていたので実際にここにくるのは初めてなのだ。

無駄な時間を過ごしてしまった。

急かねはあと語験開始まで一時間もない

固まつたままの奴もいた。

… せらばだダメ男くん

—

何でこの学校は外観が変なら構造まで変なんだ！！！

馬鹿馬鹿しい。がんばって、一生懶れ

適当に進んでいると

「おつ！」

どうやら面接会場までの矢印らしいのを見つけた。

それにしたがつて進んでいった。

左 左 右

## 階段を上って

真直ぐ

• • •

やしきやひと(西村ひとやひと) われらしきアモで来た。

もう後十分もない

急がねば

そのドアを開けると…

ん？

中には誰もいなかつた。

よーくみまねすと

アの裏に緒が張つてある事に気がついた。

その細をみると、

はすれ

「…何でやねんっ！…」

…前途多難な試験が始まった。

ちなみにその紙の裏には俺の反応を予測していたよう

ヘタレだから  
とかかれていた。

o r z

つづく！

第三弾・布団少女（前書き）

さて、いよいよノットを出したこの小説！  
新キャラ登場です！！

誤字脱字報告や感想お待ちしてます。

## 第3章・布団少女

俺はその後どうにか立ち直り廊下を歩いていた。

：廊下といつても普通の廊下ではなく坂になっていたり穴があつたり一見普通の廊下に見えるところでも絵だつたりした。

やはり他の受験者も苦戦しているようで、坂の途中でへばつていたり、穴に落ちたり、壁にぶつかったりする姿がたびたび見受けられた。

中でも坂はきつかった。

だつて五十度近くあるんデスヨーーー！

…もういじめとしか思えない（泣

それでも俺は歯をくいしばつて坂を上り、穴に落ちても這い上がり、壁にぶつかつても鼻の痛みをこらえてひたすら歩いた。歩きついづけた。

もうかれこれ一時間ぐらい歩いたときだらうか、少し前の方に横たわっている人影が見えた。

近寄つてみるとそれは…  
寝ている少女だった。

見事に寝ていた寝ていました！

敷布団と掛け布団と枕ついでに抱き枕のオプションつきで…

…でもかなりかわいい顔をしているw

「へへへ何してるんだよ俺っ！」

そのとき、

「またや？」

とこのうな声の声と同時に少女は目を開けた

「……」

俺はヤバいッつと思い飛び出すつた。

その少女は起き上がると周りを見回して、驚きの声を出し始めた。

「……」

じー

「……」

じー

「……」

じー

「……」

じー

そろそろ限界を感じていたとき。  
急に口ひびきが来ると

キュッ … すう~

今のはその少女が俺の右腕に抱きついた音と、そのあと3カウントしない間に立てはじめた寝息だ。

ん?

マジックスカ!

少女は右腕に抱きついたまま離れない。  
どうする?  
どうするよ~俺!?

1・引き剥がす

2・少女を起こす

3. ぶら下げるまま行く  
どーなるのよ俺っ！

つづく！

第3章・布団少女（後書き）

パクリですね^\_^；ネタがなかつたもんですから（汗  
次話は読者様が100人に達してからにします。  
お楽しみに♪

## 第参事・眠り姫の対処法（前書き）

今回は読者様が百人を越えたので更新しました。  
まああんまり時間がかからなかつたのは計算外でしたが、  
とてもうれしいです。  
では、大惨事もとい第参事お楽しみください。

## 第参事・眠り姫の対処法

で、前回からの続きで選択を迫られた俺。  
どーするのっおつ…

そのネタはもうええわ！

でも、その少女にあまり胸がなかつたのがせめての救いだろうか。  
もし少女が巨乳だつたりしたら俺は赤い液体にまみれながら貧血で  
倒れていただろうからな…。

ふむ、話がそれたな…。

それから俺は3つの対処法にしぼりこんだ  
………… 最後のはあまり使いたくないがな…

（作戦N○1少女を引き剥がせ！）  
でわ始めよう…

そのとき俺はある作戦の欠陥に気づいた。

ハツ！

引き剥がす＝少女に触れる

マズイ！コレは非常！にマズイ

詳しく述べてなかつたがその少女はいまネグリジエ姿だ

……触れるわけがない。

よしつ 次行こつ次つ

そこつ！本末転倒なんていわないつ！

「作戦N-02少女を起こせーー

おやぢく皆様の想像どおりですハイ  
いへり声をかけても、ゆすっても、耳元で叫んでも、振り回しても、  
etc . . .

まったく起きる気配がございませんつ（泣

負けた（泣

で、結局こうなるのか

まあ予想はしてたんだけどネ？

こんな體だけのところを右手が使えない状態で

尚且つ（なおかつ）少女を守りながら進むのは無理つてモンがござりますハイ。

「はあー、ま、ガン

バリますかあ」

俺は少女を右腕にぶら下げたまま進んでいった。

もつコレ受験関係なくネエ？

つづく！

## 第参事・眠り姫の対処法（後書き）

読者様100人突破を記念して、トークショウを開きたいと思いま  
す。

k o r o (以下k) - 始めまして。作者のk o r oです。

翔 - 犬つころと覚えてやつてくれ。

k - それはちょっと…。

翔 - だつてちげえねえだろ。友達からのあだ名、犬つていつとあ  
つたんだろ？

k - うつ 古傷を…。

翔 - まあそれはいいとして、これからどうなつていくんだ?

k - よくない！…他にもいっぱいキャラ出していきますよ。

翔 - へえ。どんなのだ？

k - 変なの。

翔 - : (睨んでいる)

k - (ビクッ) ま、まあ 今回はこの辺で。

翔 - ばつ俺はまだ言いたいことが…。

k - それではまたの機会に。さよなら～

## 第四章・りゅうきゅうページ（前書き）

五部更新！

誤字脱字報告や感想、アドバイスなどお待ちしています！  
今回は少し読みにくいかもしれませんがご容赦ください。

## 第四事・うすとすぱーと！

「まあまあまあてえええええ！」

「ヤサシイ」

俺は今追われている。

それもおそらく、ゴジ  
も尻尾を巻いて逃げるほど

氣道

勢いで

卷之三

なぜこんな状況になつたかといつと、  
事はは30分前にさかのぼる…

回憶 1

「おはせりーメンね？」

つこせつ 今まで腕にしがみついてた少女だ。

なぜ謝っているかというと…

~~~~~

俺が廊下の罠を潜り抜けていると

回憶錄

「う、うう～ん」といつて目を開けた。周りを見回し、俺のほうを見ると……

卷之三

？」

バ  
キ  
ツ

メ  
リ  
ツ

二二七

ボキッ

最後の音絶対折れた音だ！！！

試験終わるまで生きてるかな

「お、落ち着け」

## そして状況説明

回想の冒頭に戻る  
がくがくしながらで  
ハ語で便利な

卷之三

というわけだ

とりあえず名前を聞くと

「亜衣、瑞樹 亜衣だよ 亜衣様って呼びなさい」

「わかつた、垂衣な」と俺が言うと

といつてもくれてしまつた

「はいはい、亞衣様」

ところなおくと、

一コツつと満面の笑みを見させてくれた

1

やべえ、いまグツつときた  
いや、Mだからじやないぞつ！

そしてやつと最後の坂らしきところまで来た

ドアがあつたのと他の奴等  
もあの扉を目指していたからだ。  
すると亜衣が

「翔お～早くう～！」とせかしてきた

ブツコロスゾ！

「俺はお前をふら下げてたんだよ！」「早くう～

ギロツ！

「なんだああいつ？彼女イナイ暦＝年齢の俺らへのあてつけかあ？」

（怒）

「アーヴィング」

「おー、あーつ費そ'うだ!!」

「……………」

ノウイヨー

ガタガタガタ

そして冒頭へ戻る

—

いま、膝が笑つてます

反のせ

城のせいか(西行)。

： わかりません（泣）

でも、二レだけはしえる……

必死の思いで上りきると

♪  
♪  
♪

六  
二

三三七

奴隸問題とアーヴィングの死

「いつかぶつじゅうしてやるーー。」

一 黒河ああああ「

- ४८ -

## 訂正

ぜんぜん面白くないです。どちらかというと地獄絵図

でも最後のはちょっとなあ  
ヒクなあ

「眠いよ~」

「今さつさ寝たたぱっかりだろー」

つづく！

## 第四章・ひすいすぱーとー（後書き）

次事は14日更新予定です。

## 第五事・理由（ワケ）（前書き）

大分、進んできました。  
これからもがんばつていこうかと思いますので、感想やアドバイス  
待つてます。

## 第五章・理由(ワケ)

鉄の雪崩(パチンコ玉)で嫉妬狂い共を始末した後、一休みしていたときに、なぜあんなところで寝ていたのか尋ねてみた。

「なあ、亞衣?」

「ん? な~に?」

「何であんなところであんな格好で寝てたんだ?」  
ちなみにもう着替えてます。

「ん~、っとね、実は…」

side 亞衣～回想～

眠くなつてきちゃつたなあ…。

どつかにいといこないかなあ～?

「あれ?」

そういうえば「」だっけ?

まあいつか

とりあえず枕は持つてきたし、後は寝る場所だけなんだけどな～

…そういえば「」何しに来たんだっけ?

「ま、いつかあ～」

それよりお毎寝お毎寝

「それで、しづらへ歩いてこつてもう限界つてときて布団と抱き枕

があつたの

「……」

やべえ、かなりシッコリたー…

「つてかあれまよ枕だったのか?」

「うんー…そりだよーとっても寝心地がいいの翔も寝てみる?」

「…こや、遠慮しとく。」

俺としたことが、一瞬迷つてしまつた…  
一瞬だけだけだからな!

どうしてこいつは、いつもいつも無頓着なのだらうか。

で? 翔は?

「俺?」

「何で地図も持たずにあんなこといろいろこてたの?」

「地図?」

「うん、受験票の裏に地図が書いてあるの」

「そうだったのか…。」

しかし、受験票の裏を見ても地図なんて書いていなかつた。

「あれ? 書いてないぞ?」

「もしかして翔つて合格者なんじやない?」

「???」

「私は筆記試験は落ちちもつたんだけど一時面接試験で受かつたからこっちの会場で試験を受ける権利をもらつたの」

「つてことは他にも会場があるのか?」

「うん、合格者の人は西門から入つたところであるんだよー。ま、ちゃんと書いてあるじゃんー。」

よくみると口時のトート手書きで少しあく

合格者なので試験会場は西門

…と、かいてあつた

「……じゃあ畠衣のは？」

「「レだよ」

準合格者受験票

試験会場は東門から

今までの苦労はいつたい……

あせほ! よく見なかつたからだが~

o  
r  
z

俺もう立ち直れんかも

利は翔が間違えでくれたが、力がも

「だつて、翔が間違えたおかげで翔と会えたんだもん」

何でここまでは「う」とを平氣でこえるのだらうか?

ツバメ！

## 第五事・理由（ロケ）（後書き）

次事は今日の夜更新予定です。

第六事：「後の祭り」つていうことわざを作った人は偉い！（前書き）

登場人物紹介更新しちゃいます。

誤字報告、アドバイス、感想まつてま～す！

## 第六事：「後の祭り」つていうことわざを作った人は偉い！

なにはともあれ俺たちは面接会場（？）の中に入ることにした。

「ちなみに俺の受験番号はN○4649のヨロシクナンバーで  
亜衣のはN○4274でシニナヨナンバーだった。  
不吉だな…」

力チャヤツ

ドアを開くと中には面接官らしき人と一人の背の低い少年がいた。

何を話しているのか気になつたので耳を傾けると、

「だからあ～、ワイと遊ばぼつて？」

面接官の人をナンパしていた。

今日は、碌なやつと会わんな…。

「え？え？あの～？」

亜衣が声をかける

「ん？おお～美しい～ゼひワイとお付き合いを～」

ナンパ少年がいきなり亜衣に告白してきた！

「あつ～えつ～その…ごめんなさい小学生とはお付き合いできません…。」

亜衣の天然毒舌！ナンパ少年への効果はバツグンだ！

「ガーン」

つて口で言つてるし！

そうしてゐ間に面接官らしき人が話しかけてきた。

「ねえキミ～受験生よね？」

「はい、そうですけど…」

俺が答えると

「よかつた～セーフンやなかつたらビハ～よつかと思つたよ

他にどんな奴がくるんだよつ！

「ん～？さつきの子とか

「ああ～、つて何でわかつたんですか～？」

「だつて顔に出てたよ。ある意味サト　レかもね～

「まじっすか？」

俺つてそんなにわかり易かつたのか…

俺たちがそんな会話をしていくと…

「ワイはこいつ見えても受験生やでえ～

「…本当に～？」「…マジで？」

俺と睡衣と面接官の人がハモつた。

「ああホンマや…

俺たちがハモつたことよつて、よけいくつんだよつだ。  
しかし、少年の身長はかなり小さく間違えるのも無理はない。

「え、えほんつ。では、面接試験を始めます」

「うひ、あのちよつといこですか？」

「はい、なんですか？」

「あの、俺、間違えちゃつたみたいで…

「…どうこう」と…

俺はこれまでのことを話した。

…するどドアのところから。

「その話詳しく教えてくれない？」

と、いう声が聞こえてきた。

「あの、あなたは…？」

「ああ、安心して。」この面接官のことは

「もうですかじゅあ……」

詳しこいとを語り終えぬと

「ふうん、なるほどねえじやああのパチンコ玉を使つたのはあなたなのね？」

「じゃあ、あそこには置いてあつた私がすぐ苦労してとつて後で交換に行こうと楽しみにしていたパチンコ玉を使ったのはほんつとーにあなたなのね？（怒）

その場で交換しろよ…

はい

「じゃあと、ここへくれるのかなあ？」

卷之三

四  
四  
イ  
四

ガタガタガタ

「私が！！！」

ベキツ！！

「どんだけ!!!!」

スギスギスギ

卷之三

ボランティア

ゴキン！――！――！――！

! !

ドゴッ！！！！

え～っと今の音は怒りのあまり鬼神と化してしまつた面接官2（仮）

四  
四

## 絞め技かけて

それで俺の肩が脱臼して

その後、殴られた俺が壁にめり込んだ音です（泣）

…それでモ意証を失わぬし もとし失うなし俺」 て…（力添）

ヘビウ

**第六事：「後の祭り」つていうことわざを作った人は偉い！（後書き）**

次事で第壹部～受験編～は終了で～す！

次の更新は十五日の夜です。

## 第七章・第一部～受験編～ヒローグ（前書き）

受験編の最後です。

誤字報告、アドバイス、感想まつてます！

## 第七事・第一部「受験編」ヒローグ

それから俺は山吹 桜 ヤマブキ サクラ教頭先生（面接官1の事だ）に応急処置をしてもらつた。

ちなみに面接官2は鬼島 吹雪 オニジマ フブキといつてあれども校長なのだそうだ。

「おい」

鬼島校長が声をかけてきた。

「はい！」

「まだわつきの恐怖が抜けきっていないので情けない返事をしてしまつ俺……」

「お前のクラスが決まったぞ」

「え？ まだ面接も何もしてないじゃないですか？」

「1・Kな

無視かいつ！

「ああ？ なんか文句あるのかあ？」

「イエ、メツソウモナイ」

「ああ1・Kは私が担任してゐる特別クラスだから

「はあ！？」

ギロツ！

ビックウツ！

「あ、アハハツ、アナタノクラスナンテ、ウレシイナア」

「よろしい」

「怖ええ」

「そうそ、他の二人もK組だから安心しろよ～」

…どうぞどうぞ安心しようと？

そこで俺はあることに気がついた。

「特別クラスってどんなクラスなんですか？」

「ああ、中学で有名だった奴や私の気に入った奴、それとお前のようないいibriがいのある奴とかの集まりだ。正確には特殊クラスだな。」

「不安だ…激しく不安だ……。

そこで、今まで黙っていたナンパ少年が口を開いた。

「なあ、自己紹介させてもうしてもええ？」

「ん？ 別に俺はお前の事知りたくないから遠慮しとく」

「まあ、遠慮せんといてや。じゃ、いくでえ。ワイの名前は五十嵐 純 イガラシ ジュンや純つて呼んでな」趣味はキレーなネエちゃんと遊ぶこととナンパ！でもかわええとはよく言われんねんけどかっこええって言われたことがない悩み多き少年やねん…。で好きな言葉は…「あーもういい！」

「え～？、なんやおもんないなあまだ三分の一も言つてないでえ～？」

まだ三分の一もあるのかよー

そんな会話をしていると、山吹教頭が

「そろそろ、帰ったほうがいいんじゃない？」

と、声をかけてくれた。

腕時計を見ると短い針が8少し過ぎたところを長い針が2を指していた。

「げつもう八時過ぎかよー」

ちなみに俺が校門をくぐったのが三時半だったので五時間四十分もいた計算になる。

「そうだな、おーーそこにHレベーターがあるから乗れ」

「はーーー！」

「わかりましたあ～」

「うーーー」

「つと、ちょっとまで」

なぜか俺だけ呼び止められた。

「ヤリ

またいやな予感が……

「私の努力の結晶を捨てた罰だ、お前は歩いて帰れ」

「……マジッスカ？」

「ん？ ああ、大マジ」

「俺あなたのせいだ左肩脱臼してるんですけど……」

「足は大丈夫なんだろ？ ほら、さつさと行け」

「ゴメンネ？ ほら、吹雪、いいだしたら聞かない性格だから

「わかつただろ？ ほら早く行け」

「ええ！？ でも… 「いいからさつさと行け！」」

「はいーーー！」

黒河少年が家に着いたのは口付が変わつてからだったたといつ…

第壹部～受験編～fin

第弐部～新生活編～へつづく！

## 第七章・第一部～受験編～ヒローグ（後書き）

次は、第3部でお会いしまショー。

## 第八事・第弐部～新生活編～プロローグ（前書き）

始まりました、新生活編！

この度読者様が壹千名を越えました！感謝しても仕切れません（感  
涙！

誤字報告、アドバイス、感想待つてまーす

## 第八事・第弐部～新生活編～プロローグ

朝起きてみると田の前にはどこかで見たことがあるよつた天井、背中には固く冷たい感触があつた。

「ん？」

起き上がりつて周りを見るところは俺の家の玄関だつた。

……何で俺、こんなところで寝てるんだ？

そういうえば…

「…」

思い出したくないものを思い出してしまつた。

そう俺は昨日、受験に行って大変な目にあつて帰つてきたら玄関で力尽きてしまつたのだ。

……何で誰も起こしてくれなかつたんだ？

俺には両親と義理の双子の弟と妹がいる。なのになぜ誰も起こしてくれなかつたのだろう？

俺は不思議に思い家の中を探した。

……何で誰もいないんだ！

両親の寝室、弟と妹の部屋、物置、屋根裏部屋etc・・・  
後はリビングのみ。

俺は警戒しつつドアノブに手をかけた。

……なぜ警戒しているかというと前にも一度、いじつこいつことがあつたからだ。

俺の誕生日（と、いつても俺は気づいていなかつたが）のときソビングに入ってきた俺をみんながクラッカーを鳴らして驚かした。  
その後、

「――ハッピーバースデイ――！」

と祝ってくれた。

あの時は思わず涙が出そうになつたがもう驚かされるのは勘弁だ、  
寿命が縮む。

話がそれたな。

気を取り直して扉を開けると……

誰もいなかつた……

リビングを見回すとテーブルの上に置手紙があるので見つけた。

内容はこうだ、

翔、父さんと母さんはレンをつれてイギリスにいくぞ、夏休みには帰つてくるのでそれまで下の住所のマンションで暮らしていなさい。もう荷物は送つてある。

町 × 台 2 丁 目 5 - 23 - 506

P・S・楼 口ウは先に行つてるぞ。v

なああにいいい――！――！

あんの親父はまた……

いつか復讐してやる

とりあえず、この住所のところへ行かないとな……

こつして、不満と不安をたっぷり含んだ新生活は始まった。

つづく！

## 第八事・第弐部～新生活編～プロローグ（後書き）

読者様壱千名越え記念企画！

またトーケンショウです。

翔 - えーっと、とりあえず「んばんは、かな？」主人公の翔です。

亜衣（以下亜） - じんばんはあ、メインヒロインの亜衣でえ～す。  
むにやむにや

kōrō（以下k） - じんばんは！毎度おなじみkōrōでえ～す！

翔 - いつからおなじみになつたんだ、いつから～。

k - 今から

翔 - (ギロリ)

k - (ビクッ)

亜 - 喧嘩はやめよつよお～。

翔 - あの、だからなこれは…

亜 - これは？

翔 - ううつ悪かつたよ…

k - (ホツ) ではいよいよ始まりました、第弐部～新生活編～スタートしました。これは翔の学校始まるまでの話です。

翔 - 今回は新キャラは出ないんだろうな…？ 今回は俺、めちゃくち  
や酷い目にあつたんだからな？

k - 今回はそんなに出ませんよ。ただ、亜衣ちゃんのライバルが出  
現するつてことぐら～ですかね？

亜 - ～～～～～～～

k - あら～、亜衣ちゃん寝けやいましたね、じゃあ今回せひの邊で。

翔 - まて…ライバルつてどういづ…

k - はい！では、わよ～な～～

## 第九事：ハイテクマイホーム（前書き）

更新が遅れました。すいません  
誤字脱字報告・感想・アドバイスなど待つてまーす。  
変更しました。  
妹、楼のキャラを（無理やり）変えました。

## 第九事：ハイテクマイホーム

午後二時三十分俺は指定された場所へ来ていた。

「…」

なぜ無言かといふと、田の前の「それ」に圧倒されていたからだ。

「それ」とは……超超高層マンションだ。

間違つていなか、もう一度写してきたメモを見る…。

間違つていなか、俺はこの動作をもう八回も繰り返している。

ちなみに、交番にも行つたがここだといわれた。

「まあ、とりあえず入つてみるか、え～と506か…」

こんなに高いのに意外に普通なんだな。

共同玄関に入るとドアがなかつた。

周りを見てみると、パネルと一枚のプレートがあつた。そのプレートには、

指紋と静脈の認証をするので、下のパネルに手をつけてください。このマンションやベ…。

手をつけると、漫画であるみたいに緑の線が通り過ぎる。

ピー！シモン、ジョウミヤクチョッククリア、ドアガヒラキマス。

機械的な声が流れると田の前の壁と思っていたところがスッっと開いた。

…スゲエ！

気を取り直してエレベーターに乗る。（エスカレーターもあつた）なぜか、五階までしかボタンがなかつたが五階に別のエレベーターがあるのだろうか？

待つこと五分…

「遅い！」

いくらなんでも遅すぎる、昇っている感覚はあるのだが一向につか

ない。

そつしていると…

チーン！

「やつとつこたか…」

エレベーターから出るとエレベーター…

最上階だった…

「は？」

何でだ？

間違えたかと思つたが、ちゃんとプレーントライと書いてある。

「まあ、とりあえず行ってみるか。」

ここには、妹の楼がいるはずだ。

あいつのまつが詳しいだろ？…。

ここに少し、義理の妹弟のことを話しておこう。

楼と蓮は俺が、中学一年、楼と蓮が小学六年のときに親父が孤児院からもらってきて出会った。

親父曰く「いい田」をしているらしい。

始めはなかなか、家族に溶け込めなかつたが次第に馴染んでいった。楼と蓮はかなり特徴的な外見をしているせいで、一時期いじめられていた時期があつた。

…一人とも、銀髪に蒼田なのだ。

そのときに、いろいろ構つてやつたからだろ？か、今では懐かれている。

そんなことを考へていると、506号室の前まで来た。

インターホンを押す。

ピンポーン！

『……誰だ？』

楼の声が聞こえる。どうやら、間違つてはいなさそつだ。

「俺だ、俺。」

『俺俺詐欺ですか。そうですか。他をあたってください』

「までまでまで！」

『本当に愚兄かあ？じゃあテストだ』

「テストってだから俺だつて、翔だ！」

『問題1、私の愚兄の身長は何センチ？』

「無視すんなあああ！！！」

『そ、そのツッ』『は…愚兄か。だったら早く言えよかったのに…』

「今さつきから何回も言つてるだー！」

『じゃ、開けるだ。』

「無視するんじゃねえええ！」

つづく！

## 第九事：ハイテクマイホーム（後書き）

次事は記念すべき第拾事です！

第拾事・毒女もとい毒妹（前書き）

かなり更新が遅れてしまいました。

まことに申し訳ございません。

言い訳がましいですが風邪をこじらせてしまつて遅れました。

ホントーーーーにすいませんこれからもHAPPENING-よ  
ろしくお願いします。

## 第拾事・毒女もとい毒妹

力チャヤ 力チャ

ガチャツ

扉が開く

その中からは案の定見慣れたマイシスターが現れた。

「…ただいまかな？マイシスター？」

「…お帰りなさいかな？愚兄？」

「…ああ そうだつたこいつはこういう奴だつたな  
こいつが俺のマイシスターこと楼だ。

いつからかこいつこう毒舌ばかり吐くようになつた。

「いやなつてしまつた、だな…

「俺はいくら血がつながつてないとはいえ兄にそんなことを言つ妹  
に育てた覚えはない」

「ああ、私はお前に育てられた覚えはないぞ、愚兄」

「…愚兄いうな樓」

「事実なのだからしようがないだらう？ヘタレ愚兄」

「ヘタレいうな…ついでに愚兄も」

「ふむ、じゃあ変態翔」

「いやまで、何故呼び捨て？何故変態？」

「愚兄と言つなとお前がいつたんだろう？変態は事実だからだ」

「呼び捨てはともかく変態は納得いかん！」

「お前の部屋の一一番目の引き出しの一重底の中…」

「何で知つてつ…すいませんでした」

「あの…ほつほら、俺も健全な十五歳つて」と

「その…隠してるものもあるわけで…」

「ん？聞こえんぞ？ほらもつと大きい声で」

「すいませんでした」

「もつとだ」

「ああもう…すいませんでしたあ…」

「よのしー」

「…」

人の机の中を勝手に見やがって！」

「いや？ たまたまお前が見ている所をみかけてな…」  
「覗き見してんじゃネエ！ しかも何でわかつた！？」

「声に出てたぞ変態翔」

「変態翔いうな！」

「なら愚兄に戻すが？」

「…もうそれでいい」

認めてしまつた…

「これからどうなることやい…」

場所は変わつてこの家のリビング

俺はこの料理を前にして脂汗をかいていた…

そう、お約束どおりマイシスターは料理が壊滅的に下手なのだ…

…こや、もうコレは料理ではない毒物だ。

「で？ 楼、コレは何だ？」

「ん？ カレーライスだ。」

「今すぐ全世界のカレーに謝れ」

「なぜだ？ 立派なカレーではないか」

「いや。俺は認めんぞ…少なくとも俺は食わん！」

「こんなに美味しそうな色でわないか」

「紫色がそつだというならいますぐ精神科行つて来い」

「湯気も立ち上ってるだ？」

「それは瘴気だ」

「匂いもいいではないか？」

「まるでないとあらゆる腐敗物を混ぜたような臭いだ

「どうしても食わんのか？」

「絶対に食わん！」

「むう…ならば仕方ない」

そういうと楼は指を鳴らした

パチッ

ガシャ

「……………これはどういうことだ？ 楼よ？」

この恵々しいハイテクハウスには拘束機能までついてこるようだ。

「こうなつたら嫌でも食わすだけだ」

死の宣告をすると楼はまるで悪魔も裸足で逃げ出しそうな笑みを作  
つた

ニヤリ

口が無理やり口じき開けられる。

パクッ

「グハッ…」

体が麻痺していくのがわかつた。

意識が暗転していく

もう駄目だ…

つづく！

## 第拾事・毒女もとい毒妹（後書き）

今回は第拾事でした。

いかがだったでしょうか紹介も更新する予定なので見てやってください。

それから、今回は第十話目ですので次事は番外編を書くつかと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3850b/>

---

HAPPENING!

2010年10月11日01時17分発行